

大学生用リスクテイキング行動尺度 (RIBS-U) の作成

小 塩 真 司¹⁾²⁾

問題と目的

若者の犯罪行為や逸脱行為に対する関心は尽きることがない。飲酒、喫煙、避妊具なしの性交渉、薬物使用、無謀な運転、飲酒運転、破壊行為、万引きなど、様々なリスクを伴う行動(リスクテイキング行動)は青年期に始まるといってもよいであろう。わが国では中高生の犯罪が話題に登ることが多いが、成人式での騒動や暴走行為など、後期青年期にあたる20歳前後の若者のリスクテイキング行動も注目を集めている。

青年のリスクテイキング行動(adolescent risk-taking behavior)とは、直接的あるいは間接的に、若者の幸福、健康、さらにライフコースまでもを危険にさらしうる行動のことである(Jessor, 1998)。最も初期の研究では、青年のリスクテイキング行動は“問題行動(problem behavior)”と称される、非行、ドラッグ使用、アルコール依存、早期の性行為などの法や規則違反、通常社会的制裁を受ける特定の行動に限られていた。しかし近年の研究では、青年のリスクテイキング行動として取り上げられる行動の種類が増加している。

青年期のリスクテイキング行動は、相互に独立した行為というよりも、相互関連する傾向にある(Biglan, Wendler, Wirt, Ary, Noell, Ochs, French, & Hood, 1990; Donovan & Jessor, 1985; Jessor, 1984; Jessor & Jessor, 1977)。そして、ある種のリスクテイキング行動(例えば過度の飲酒)に従事する若者が他の行動(例えば喫煙)にも従事する傾向にあることは、“問題行動症候群(problem behavior syndrome)”と呼ばれる(Jessor & Jessor, 1977など)。しかし、どのような行動を青年のリスクテイキング行動に含めるかは、研究者間で一致していない。例えば Donovan & Jessor (1985)は、青年の問題行動を単次元の構成概念として捉えている。一方で Thorson & Powell

(1987)は青年の問題行動を“危険な行動や暴力への方向づけ”, “勇敢さや冒険への方向づけ”, “スリル探求と高速の運転”, “危険な活動に対する魅力”の4因子から捉えている。またわが国では、長谷川(1988, 1990)が、青年の問題行動を測定するために、主に高校生を対象とした90項目からなる尺度を作成している。そして因子分析を行うことにより、男女それぞれ、内容の異なる5因子で構成されることを明らかにしている。これらの先行研究において因子構造が異なる理由のひとつは、各研究者が異なる行動を青年のリスクテイキング行動として取り上げている点にある。多様な行動が尺度内に含まれればより多様な因子が見いだされることは自明のことであるが、Shaw, Wagner, Arnett, & Aber (1992)が述べるように、むやみに項目を加えることは尺度全体の誤差要因を増加させるだけかもしれない、再現性が著しく低い結果となるかもしれない。

日常生活における行動は、どのようなものであっても多少のリスクを伴うといえる。また、実際に危険であると予想される行動であったとしても、青年自身によって危険であると認知されていないか、逆に危険であると認知されていても実際の危険性はあまりない行動も存在する。Alexander, Kim, Ensminger, Johnson, Smith, & Dolan (1990)は、大人によって「危険だ」とされる行動が、若者にとっても同じ意味をもつかどうかは明らかではないと述べている。例えば、スピードを出した運転は大人にとっては危険に見えるが、若者にとっては良い運転者の指標となるかもしれない。従って、どのような行動がリスクを伴うものであるかは、青年自身の社会的文脈において決定されるといえるだろう。

以上のことをふまえ、本研究ではまず第1に、大学生のリスクテイキング行動の包括的で比較的単純化された尺度を作成し、その信頼性と妥当性を検討する。項目の収集の際には大学生が日常的に行う可能性が高く、ある程度危険を伴う行動と認知されている行動に注目する。そして収集された項目を大学生に実施し、それらの行動をどの程度行うのか、またそれらの行動間に相互関連が

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科研究生
2) 現所属：中部大学人文学部

大学生用リスクテイキング行動尺度 (RIBS-U) の作成

見られるかどうかを検討する。また、日常的に数多くのリスクテイキング行動を頻繁に行う大学生は、事故や授業の欠席など、何らかの否定的な結果に直面する可能性が高いと考えられる。そこで本研究では第2に、作成された尺度がそのような否定的な結果を予測するか否かを検討する。

調査1：項目の収集

大学生が日頃行う可能性があり、かつ危険を伴う可能性があると考えられている行動を収集する。

方法

自由回答形式の質問紙による調査を行った。“あなたやあなたと同じ年代の人たちが日頃行う（あるいは行う可能性のある）ことで、行った人の身体や社会的立場、財産などに悪影響を及ぼす危険性のある行動”について、各被調査者につき5つずつ具体的に挙げさせた。被調査者は愛知県内の私立大学生60名（男性21名、女性39名）であり、平均年齢は20.20歳であった。

結果

60名の被調査者からのべ274の行動が記述された。このうち、記述が不明確であった28の文章を除く246の行動について、同一の行動をまとめることで、53の行動に分類した。53の行動のうち、2人以上によって記述された行動は21あった：“たばこを吸うこと”（男性12名、女性20名）、“非合法の薬物を使用すること”（男性5名、

女性13名）、“パチンコや競馬などの賭け事をする”（男性5名、女性10名）、“大量の酒を飲むこと”（男性3名、女性8名）、“自動車やバイクでスピード違反をすること”（男性5名、女性5名）、“人のものや金を盗むこと”（男性5名、女性4名）、“信号無視をすること”（男性3名、女性6名）、“借金をすること”（男性3名、女性5名）、“万引きをすること”（男性2名、女性6名）、“売買春（援助交際など）をすること”（男性2名、女性5名）、“うそをつくこと”（男性2名、女性5名）、“飲酒運転をすること”（男性1名、女性5名）、“飲み会などでイッキのみをすること”（男性2名、女性3名）、“カンニングをすること”（男性0名、女性5名）、“電車への駆け込み乗車”（男性0名、女性3名）、“授業や待ち合わせに遅刻すること”（男性2名、女性1名）、“ずる休みをすること”（男性0名、女性2名）、“夜ライトをつけずに自転車に乗ること”（男性0名、女性2名）、“公共交通機関の無賃乗車”（男性0名、女性2名）、“無免許運転をすること”（男性0名、女性2名）、“約束を破ること”（男性0名、女性2名）。

調査2：大学生用リスクテイキング行動尺度の因子分析と得点分布³⁾

方法

被調査者 愛知県内の私立大学生523名（男性257名、女性266名）。平均年齢19.82歳（18-28歳）。調査は2000

Table 1 RIBS-U の因子分析結果 (Promax 回転後の因子パターン), I-T 相関, 出現率

	I	II	I-T	I-T	出現率 (%)			
			下位	全体	1	2	3	4
個人的リスク行動								
飲酒運転をすること	.64	.08	.55	.53	68.8	16.6	10.3	4.2
たばこを吸うこと	.61	-.25	.44	.26	66.3	7.5	7.3	18.9
自動車やバイクでスピード違反をすること	.60	.02	.50	.44	41.1	18.4	15.5	25.0
飲み会などでイッキのみをすること	.58	.13	.53	.50	38.4	32.7	16.6	12.2
大量の酒を飲むこと	.57	.15	.51	.50	40.5	31.7	18.2	9.6
パチンコや競馬などの賭け事をする	.39	-.08	.31	.26	74.0	12.8	5.5	7.6
社会的リスク行動								
授業や待ち合わせに遅刻すること	-.05	.61	.47	.33	9.2	43.6	30.8	16.4
信号無視をすること	.01	.53	.42	.35	13.4	41.9	28.7	16.1
約束を破ること	-.01	.52	.43	.32	19.5	66.9	11.3	2.3
電車への駆け込み乗車	-.15	.52	.35	.21	25.2	44.7	22.0	8.0
ずる休みをすること	.11	.49	.44	.40	12.6	37.5	29.8	20.1
うそをつくこと	.13	.38	.35	.35	4.8	45.9	35.6	13.8
因子間相関		.32						
I-T: 各項目と対応する下位尺度 (当該項目を除く) との相関係数								

3) 本調査の一部は、日本発達心理学会第12回大会にて発表されている。

年5月に、講義時間を利用して一斉に行われた。

調査内容 大学生用リスクテイキング行動尺度：調査1において2人以上によって記述された21の行動をランダムに並べ、大学生用リスクテイキング行動尺度 (Risk-taking Behavior Scale for Undergraduates; RIBS-U) を作成した。“まったくしない”(1点)，“することがある”(2点)，“時々する”(3点)，“よくする”(4点)の4段階で測定された。

結果

RIBS-Uの因子分析 まず調査に用いられた21項目の平均値、標準偏差、尖度、歪度を算出し、著しく歪んだ分布をもつ5項目を分析からはずした。そして残りの16項目について、男女込みで因子分析(共通性の初期値を1とした反復主因子法)を行った。固有値の減衰状況に基づいて2因子解が適当と判断した。その結果として著しく共通性の低かった4項目を分析から外し、残りの12項目に対して再び2因子解を仮定した因子分析(反復主因子法)を行った。12項目による全分散のうち2因子によって説明できる割合は42.25%、反復推定後の説明分散は3.72であった。Table 1に、Promax回転後の因子パターンおよび項目-下位尺度間相関(I-T下位; 当該項目を除く)、項目-尺度全体間相関(I-T全体; 当該項目を除く)、回転後の因子間相関、出現率を示す。

第1因子には飲酒、喫煙、スピード違反などの6項目が高い正の負荷量を示し、第2因子には遅刻、約束を破る、駆け込み乗車、信号無視などの6項目が高い正の負荷量を示していた。第1因子に高い負荷量を示した項目の内容は、自分自身に対して悪影響(たとえば、病気、死など)を及ぼす可能性のある行動だと考えられる。一方で、第2因子に高い負荷量を示した項目の内容は、直接的に自分自身に悪影響を及ぼす行動というよりも、対人関係や社会との関係の中で間接的に自分自身に対して悪影響(たとえば、社会的地位の喪失など)を及ぼす可能性のある行動だと考えられる。以上のことを考慮し、RIBS-Uの第1因子を「個人的リスク行動」因子、第2因子を「社会的リスク行動」因子と命名した。

次に、男女それぞれで男女込みと同様の因子が得られるかどうかを検討した。男女込みの因子分析で得られたPromax回転後の因子パターンをターゲットとし、男女別に反復主因子法、斜交Procrustes回転による確認的因子分析を行った。その結果、男女それぞれにおいて男女込みで行った因子分析とほぼ同様の因子パターンが得られた。男女込みで得られた回転後の因子パターンと男女別で得られた回転後の因子パターンとの間の一致係数(Harman, 1976)を算出したところ、当該パターン間の2つの一致係数は男性で.98と.96、女性で.95と

.96と、十分な値が得られた。

得点化については、全12項目の平均値を算出しRIBS-U総得点(平均2.11, SD .47, α = .73)、第1因子に高い負荷量を示した6項目の平均値を算出し「個人的リスク行動」得点(平均1.83, SD .68, α = .74)、第2因子に高い負荷量を示した6項目の平均値を算出し「社会的リスク行動」得点(平均2.38, SD .52, α = .68)とした。なお、「個人的リスク行動」得点と「社会的リスク行動」得点との間の相関は r = .24 (p < .001)であり、「個人的リスク行動」得点とRIBS-U総得点との間の相関は r = .85 (p < .001)、「社会的リスク行動」得点とRIBS-U総得点との間の相関は r = .72 (p < .001)であった。

Table 1には項目-尺度間相関(I-T)も示してある。各項目と対応する下位尺度(当該項目を除く)との相関係数(I-T下位)は、「個人的リスク行動」で r = .31 - .55、「社会的リスク行動」で r = .35 - .47であった(Pearsonの積率相関係数: 全て p < .001)。従って、RIBS-Uの各下位尺度はそれぞれある程度のまとまりがあると考えられる。また、各項目とRIBS-U全体(当該項目を除く)との相関係数(I-T全体)は尺度全体で r = .21 - .53であった(Pearsonの積率相関係数; 全て p < .001)。従って、RIBS-Uの12項目は全体としてもある程度のまとまりがあると考えられる。

男女差及び年齢差 各得点について、性別(2:男女)×年齢(2:20歳未満, 20歳以上)の2要因分散分析を行った。その結果、交互作用および年齢の主効果はいずれの得点においてもみられず、全ての得点について性別の主効果がみられた(RIBS-U総得点: $F(1,519)$ = 4.54, p < .05; 「個人的リスク行動」得点: $F(1,519)$ = 49.63, p < .001; 「社会的リスク行動」得点: $F(1,519)$ = 21.56, p < .001)。RIBS-U総得点と「個人的リスク行動」得点については女性よりも男性の得点の方が高く、「社会的リスク行動」得点については男性よりも女性の得点の方が有意に高かった。

得点分布 RIBS-U総得点、「個人的リスク行動」得点、「社会的リスク行動」得点の男女込み、男女別の得点分布をFigure 1からFigure 3に示す。RIBS-U総得点については特に女性について分布がやや低い方に歪んでおり、1.5点から2.0点の範囲に最も多くの被調査者が属していた。「個人的リスク行動」得点については男女とも右下がりの分布となっており、特に女性は約42%の被調査者が1.0点から1.5点の範囲の得点を示した。「社会的リスク行動」得点については男女ともほぼ同じかたちの分布を示した。

RIBS-Uから外された項目との関連 当初設定した

大学生用リスクテイキング行動尺度 (RIBS-U) の作成

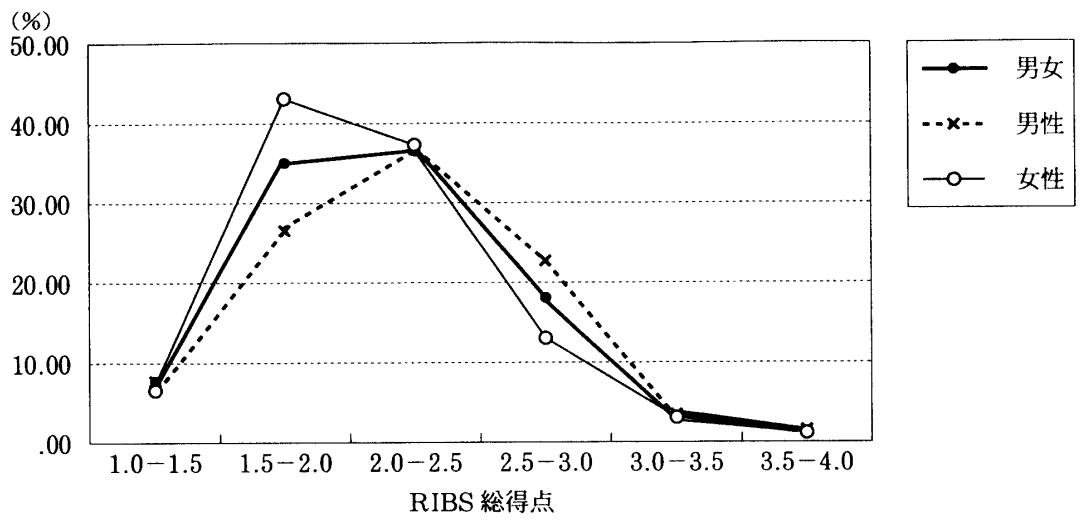


Figure 1 RIBS-U 総得点の得点分布

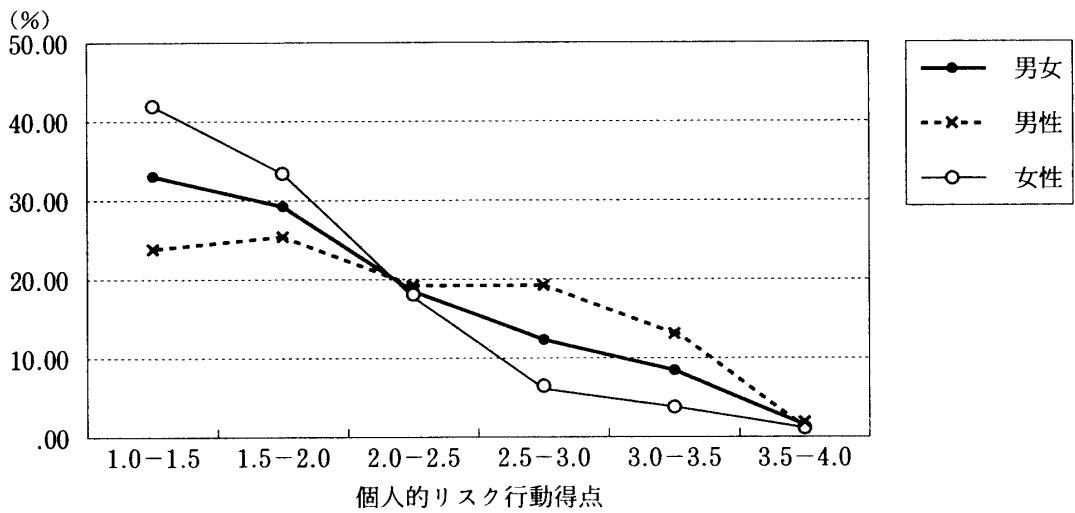


Figure 2 個人的リスク行動の得点分布

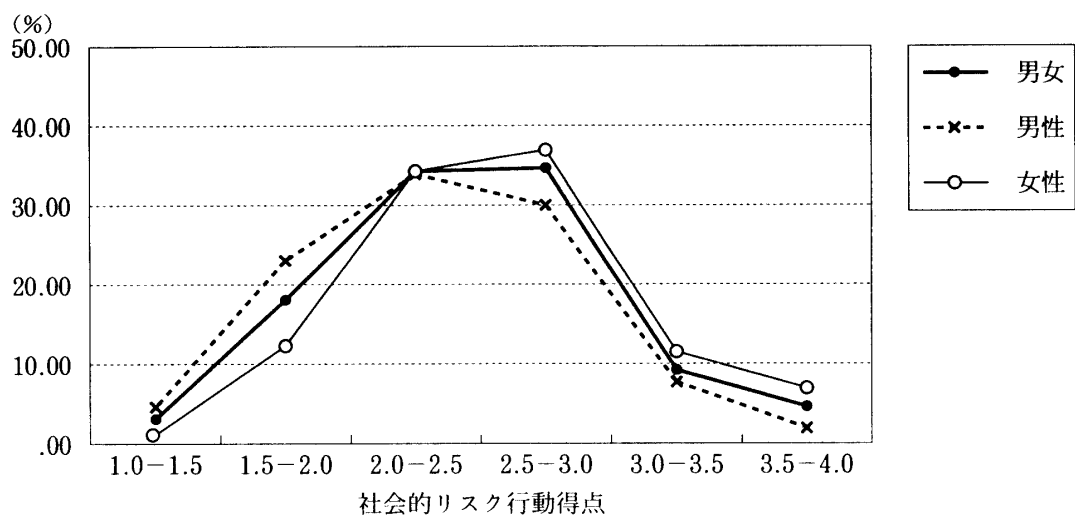


Figure 3 社会的リスク行動の得点分布

資 料

21項目のうち RIBS-U から外された項目は“無免許運転をすること”, “非合法の薬物を使用すること”, “カンニングをすること”, “万引きをすること”, “借金をすること”, “人のものや金を盗むこと”, “公共交通機関の無賃乗車”, “夜ライトをつけずに自転車に乗ること”, “売買春(援助交際など)をすること”の9項目である。これらの項目は得点分布が著しく歪んでいることや各因子に十分な負荷量を示さなかったことから, RIBS-U から外された。しかし, これらの項目内容はいずれも大学生のリスクテイキング行動として重要な意味をもつものと考えられる。そこで, これらの項目と RIBS-U 各得点との間の Spearman の順位相関係数を算出した (Table 2)。その結果, RIBS-U 総得点とこれら9項目全てとの間には有意な正の相関がみられた。また「個人的リスク行動」得点については“人のものや金を盗むこと”以外の項目との間に, 「社会的リスク行動」得点については“無免許運転をすること”, “非合法の薬物を使用すること”以外の項目との間に有意な正の相関がみられた。従って, RIBS-U で測定されるリスクテイキング行動は, これら RIBS-U から外され

た行動にも関連するといえる。

調査3 : RIBS-U の再検査信頼性

RIBS-U の再検査信頼性を検討する。

方法

調査1の被調査者のうち178名(男性77名, 女性101名)に対し, 約6カ月の間隔をあけて再び RIBS-U を実施した。

結果

約6カ月の間隔をあけた検査-再検査間の相関係数は, RIBS-U 総得点で $r = .83$, 「個人的リスク行動」得点で $r = .89$, 「社会的リスク行動」得点で $r = .75$ であった (いずれも $p < .001$)。従って, RIBS-U で測定されるリスクテイキング行動は, 比較的長期間にわたってみられる安定した行動傾向であると考えられる。

調査4 : 否定的出来事の予測 (1)

RIBS-U で測定されるリスクテイキング行動の内容には, 違法な行為も含まれている。調査3で示されたように, これらの行動が比較的長期間にわたって行われる

Table 2 RIBS と RIBS から外された項目との関係 (Spearman の順位相関係数)

	RIBS-U 総得点	個人的リスク	社会的リスク	平均	SD
無免許運転をすること	.17***	.17***	.07	1.74	.81
非合法の薬物を使用すること	.14**	.18***	.02	1.06	.29
カンニングをすること	.39***	.32***	.28***	2.31	1.21
万引きをすること	.21***	.19***	.13**	1.04	.28
借金をすること	.34***	.31***	.23***	1.07	.35
人のものや金を盗むこと	.13**	.08	.14**	1.11	.41
公共交通機関の無賃乗車	.26***	.11*	.32***	1.03	.24
夜ライトをつけずに自転車に乗ること	.21***	.11*	.25***	1.70	.76
売買春(援助交際など)をすること	.14**	.12**	.09*	1.45	.74

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 3 質問内容のコレスポネンス分析結果, 選択者数

	カテゴリースコア		選択者数	
	第1軸	第2軸	人数	%
交通事故なし	-.27	-.31	140	84.34
交通事故あり	1.47	.65	26	15.66
警察からの注意なし	-.37	.04	131	78.92
警察からの注意あり	1.39	-.16	35	21.08
大人からの注意なし	-.77	.70	70	42.17
大人からの注意あり	.56	-.51	96	57.83
固有値	.45	.29		
説明率	44.91%	28.94%		

とすれば、そのような行動を行う者ほど事故にあったり、警察や大人から注意を受ける機会が多くなると予想される。そこで、RIBS-U で測定されるリスクテイキング行動がそのような出来事に遭遇する機会を予測するか否かを検討する。

方法

調査 2 の被調査者のうち 166 名 (男性 73 名, 女性 93 名) に対し, 約 6 カ月後に再度調査を行った。この調査は調査 3 の翌週に行われ, 被調査者の大部分は調査 3 と重複している。質問内容は, “1. 交通事故にあったこと” “2. 警察に捕まったり注意を受けたこと” “3. 親以外のおとなに注意されたり怒られたこと” が過去半年の間にあったかを “あった”, “なかった” の 2 件法で尋ねた。

結果

コレスポネンス分析による質問内容の要約 3 つの質問内容についてコレスポネンス分析を行った (Table 3)。累積説明率から 2 次元を採用した。第 1 次元はプラスの方向に交通事故あり, 警察からの注意ありのカテゴリーの重みが大い。よって「過失を伴う事故」を表す軸であると考えられる。第 2 次元はプラスの方向に交通事故あり, 大人からの注意なしのカテゴリーの重みが大い。よって「過失を伴わない事故」を表す軸であると考えられる。

相関関係 各個人について第 1 軸・第 2 軸のサンプルスコアを算出し, 男女込みおよび男女別に, 2 つのサンプルスコアと RIBS-U 各得点との相関係数を算出した (Table 4)。男女込みと女性において, 「過失を伴う事故」を表す第 1 軸と RIBS-U 各得点との間に正の有意な

相関関係がみられた。男性では, 第 1 軸と RIBS-U 総得点・「社会的リスク行動」との間に正の有意な相関関係がみられた。「過失を伴わない事故」を表す第 2 軸と RIBS-U 各得点との間には, 有意な相関はみられなかった。

重回帰分析 次に, 各サンプルスコアを基準変数とし, RIBS-U の 2 つの下位尺度を説明変数とした重回帰分析を男女込み, 男女別に行った (Table 5)。その結果, 男性については「社会的リスク行動」が「過失を伴う事故」を, 女性については「個人的リスク行動」が「過失を伴う事故」を有意に予測することが示された。また男女とも「個人的リスク行動」および「社会的リスク行動」は, 「過失を伴わない事故」の有意な予測因とはならなかった。

これらの結果は, RIBS-U が過失を伴う, 自らが原因となる事故を予測する可能性があることを示している。また, 男女で「過失を伴う事故」を予測する RIBS-U の下位側面は異なっており, 男性では「社会的リスク行動」を頻繁に行う者ほど, 女性では「個人的リスク行動」を頻繁に行う者ほど過失を伴う事故をより経験する傾向にあった。

調査 5 : 否定的出来事の予測 (2)

リスクテイキング行動により従事する大学生は, 大学の授業への出席数が少ないことが予想される。そこで, RIBS-U で測定されるリスクテイキング行動が授業の出席数を予測するか否かを検討する。

Table 4 各サンプルスコアと RIBS-U 各得点との相関 (Pearson の積率相関係数)

	男女 (n=166)		男性 (n=73)		女性 (n=93)	
	第 1 軸	第 2 軸	第 1 軸	第 2 軸	第 1 軸	第 2 軸
個人的リスク	.26***	.06	.16	.13	.28**	-.02
社会的リスク	.21**	-.04	.29*	-.09	.24*	.01
RIBS-U 総得点	.30***	.02	.28*	.04	.31***	-.01

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 5 サンプルスコアを基準変数, RIBS-U の 2 つの下位尺度を説明変数とした重回帰分析

説明変数	男女 (n=166)		男性 (n=73)		女性 (n=93)	
	基準変数		基準変数		基準変数	
	第 1 軸	第 2 軸	第 1 軸	第 2 軸	第 1 軸	第 2 軸
個人的リスク	.22**	.08	.10	.16	.22*	-.03
社会的リスク	.15	-.07	.26*	-.13	.14	.02
R ²	.09***	.01	.09*	.03	.10*	.00

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

方法

調査2の実施後18回の授業のうち、約3週に一度、授業時に課題を行い、その課題の提出によって授業への出席とみなした。課題が行われた7回の授業への出席を各被調査者についてカウントし、各被調査者の出席数とした。なお、課題を行い出席をとることは初回の授業開時に伝えてあり、被調査者の照合は学籍番号により行われた。本調査における分析対象は、調査2の被調査者のうち291名（男性148名、女性143名）であった。

結果

全被調査者における平均出席数は7回中5.19 (*SD* 1.74) 回であった。男女差の検討を行ったところ、男性よりも女性の方が平均出席回数が多かった（男性平均4.97, *SD* 1.85; 女性平均5.43, *SD* 1.59; $t(289)=2.27$, $p<.05$ ）。

男女込みおよび男女別の、出席数とRIBS-U各得点との相関をTable 6に示す。男女とも、RIBS-U総得点および「個人的リスク行動」と出席数との間に有意な負の相関が見られた。また男女込みおよび男女別に、出席数を基準変数、「個人的リスク行動」「社会的リスク行動」得点を説明変数とした重回帰分析を行ったところ、男女ともに「個人的リスク行動」の出席数への有意な負の標準偏回帰係数が見られた（Table 7）。以上のことから、男女ともに「個人的リスク行動」に従事する者ほど授業に欠席する傾向にあることが明らかにされた。

考 察

調査1では、青年のリスクテイキング行動を、直接的

あるいは間接的に、若者の幸福、健康、さらにライフコースまでもを危険にさらしうる行動（Jessor, 1998）と定義し、大学生が日常的に行う可能性があり、身体・社会的立場・財産などに悪影響を及ぼす危険性があると大学生自身が認識している行動を収集した。60名の被調査者のうち10名以上が回答した項目は多いものから順に、喫煙、非合法の薬物、賭け事、飲酒、スピード違反であり、これらの行動は比較的多くの大学生が、危険性を伴う行動として認識しているといえる。

調査2では調査1で得られた21の行動を用いて尺度を作成し、最終的に12の行動からなるRIBS-Uを構成した。Figure 1を見ると、ほとんどの大学生がRIBS-Uの12項目のうちいずれかの行動を行っていた。従って、RIBS-Uに含まれる行動は、大学生が日常的に行う可能性のある行動だといえる。またRIBS-Uの因子構造の検討を行った結果、飲酒、喫煙、車の運転など主に自分の身体に対して悪影響を及ぼす可能性のある「個人的リスク行動」と、遅刻、約束を破るなど社会的立場の面で悪影響を及ぼす可能性のある「社会的リスク行動」という、相互に正の相関関係にある2つの因子が見いだされた。Figure 2の得点分布から、「個人的リスク行動」については男性の約23%、女性の約42%の被調査者が1.0点から1.5点の得点を示していた。一方でFigure 3を見ると、「社会的リスク行動」については男女とも60%以上が2.0点から3.0点の得点を示していた。従って、本研究で調査対象とされた大学生は、「個人的リスク行動」よりも「社会的リスク行動」により従事する傾向にあるといえる。

Table 6 出席回数とRIBS-U各得点との相関（Pearsonの積率相関係数）

	出席回数		
	男女 (n=291)	男性 (n=148)	女性 (n=143)
個人的リスク	-.28***	-.28***	-.23**
社会的リスク	-.09	-.05	-.21*
RIBS-U総得点	-.25***	-.22**	-.27**

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

Table 7 授業への出席数を基準変数、RIBS-Uの2下位尺度を説明変数とした重回帰分析

説明変数	基準変数		
	出席回数		
	男女 (n=291)	男性 (n=148)	女性 (n=143)
個人的リスク	-.28***	-.30***	-.18*
社会的リスク	-.01	.06	-.14
R ²	.08**	.08**	.07**

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

また調査2では、RIBS-Uの2つの因子は男女それぞれに分析を行っても同様に見いだされる、男女に共通した因子であることが明らかにされた。しかしRIBS-Uの各得点の男女差を検討したところ、RIBS-U総得点と「個人的リスク行動」得点については女性よりも男性の得点の方が高く、「社会的リスク行動」得点については男性よりも女性の得点の方が有意に高いという結果が得られた。Figure 1からFigure 3の得点分布を見ると、特に「個人的リスク行動」で男女の得点分布が異なっており、男性の方が女性よりも、「個人的リスク行動」に従事する傾向があるといえる。

さらに調査2では、RIBS-Uから外された項目とRIBS-U各得点との関連を検討した。Table 2に示されたように、RIBS-Uの各得点は外された項目とも正の有意な相関を示した。分析の段階でRIBS-Uから外された項目の多くは、得点分布が著しく歪んでいた項目である。しかしこれらの項目のいくつかは、違法な行為であり、いずれも大学生のリスクテイキング行動として重要な意味をもつものと考えられる。RIBS-Uの各得点とこれらの項目と正の関連を示すという本研究の結果は、RIBS-Uで測定されるリスクテイキング行動に従事する大学生は、これら違法な行為をする可能性も高いことを示していると考えられる。さらに調査4および調査5の結果は、RIBS-Uで測定されるリスクテイキング行動に従事する大学生が、過失を伴う事故を引き起こしたり、授業に欠席する傾向にあることを明らかにした。これらの結果は、リスクの高い行動が相互に独立であるというよりも、相互に関連することを示している。このことは、「問題行動症候群 (Jessor & Jessor, 1977など)」と同様の現象が、わが国の大学生においても見られることを意味していると考えられる。

RIBS-Uの各指標の α 係数は.70前後とそれほど高い値ではないが、調査3における検査-再検査間の相関係数の高さは、これらの行動が比較的長期間にわたって継続的に行われるものであることを意味している。そして調査4では、これらの行動を行う者ほど交通事故にいたり警察や大人から注意を受ける可能性が高くなること、調査5ではこれらの行動を行う者ほど講義に出席しない傾向にあることが示された。このことは第1に、RIBS-Uで測定されるリスクテイキング行動は比較的長期間にわたる行動傾向であること、第2にその行動傾向は事故や学業行動にも結びつく可能性があることを意味している。

以上のように、本研究で作成されたRIBS-Uはある程度の信頼性があり、調査4や調査5の結果からある程度予測的妥当性が示されたと言える。そして本研究の結

果は、多くの大学生が日常的に何らかのリスクテイキング行動に従事することを示している。青年期はライフサイクルにおいて様々な変化を伴う、重要な発達段階である。広い範囲の探求行動や実験的行動は青年期発達において本質的なことであり、そのような変化の過程において、リスクテイキング行動は通常の青年期発達によく見られる (Irwin, 1993)。わが国においては、多くの制約がなくなり、比較的自由な行動をとることができる大学生という時期が、そのような探求行動や実験的行動が見られる時期であるとも考えられる。今後は、リスクを伴うと認識しているにもかかわらず、なぜ多くの大学生がそのような行動をとるのかについて、青年期発達の視点をふまえて検討していく必要があるだろう。

引用文献

- Alexander, C.S., Kim, Y.J., Ensminger, M., Johnson, K.E., Smith, B.J., & Dolan, L.J. 1990 A measure of risk taking for young adolescents: Reliability and validity assessments. *Journal of Youth and Adolescence*, 19, 559-569.
- Biglan, A., Wendler, C., Wirt, R., Ary, D., Noell, J., Ochs, L., French, C., & Hood, D. 1990 Social and behavioral factors associated with high risk sexual behavior among adolescents. *Journal of Behavioral Medicine*, 13, 245-261.
- Donovan, J.E. & Jessor, R. 1985 The structure of problem behavior in adolescence and youth adulthood. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 53, 890-906.
- Harman, H.H. 1976 *Modern factor analysis*. 3rd ed. Chicago: University of Chicago Press.
- 長谷川博一 1988 青年の問題行動傾向の構造 日本教育心理学会第30回総会発表論文集, 960-961.
- 長谷川博一 1990 青年期男女にみられる問題行動傾向の構造 東海女子大学紀要, 9, 75-84.
- Irwin, Jr., C.E. 1993 Adolescence and risk taking: How are they related? In Bell, N.J. & Bell, R.W. (Eds.) *Adolescent Risk Taking*. Newbury Park, CA: SAGE Publications, 7-28.
- Jessor, R. 1984 Adolescent development and behavioral health. In Matarazzo, J.D., Weiss, S.M., Herd, J.A., Miller, N.E., & Weiss, S.M.

- (Eds.) *Behavioral health: A handbook of health enhancement and disease prevention*. New York: Cambridge University Press. Pp.69-90.
- Jessor, R. 1998 New perspectives on adolescent risk behavior. In Jessor, R.(Ed.) *New Perspectives on Adolescent Risk Behavior*. New York: Cambridge University Press. Pp. 1-10.
- Jessor, R. & Jessor, S.L. 1977 *Problem behavior and psychosocial development: A longitudinal study of youth*. New York: Academic Press.
- Shaw, D.S., Wagner, E.F., Arnett, J., & Aber, M. S. 1992 The factor structure of the Reckless Behavior Questionnaire. *Journal of Youth and Adolescence*, 21, 305-323.
- Thorson, J.A. & Powell, F.C. 1987 Factor structure of a lethal behaviors scale. *Psychological Report*, 61, 807-810.

(2001年9月20日 受稿)

ABSTRACT

Development and validation of a Risk-taking Behavior Scale for Undergraduates (RIBS-U)

Atsushi OSHIO

The purpose of this paper was to develop and provide validation information for a Risk-taking Behavior Scale for Undergraduates (RIBS-U). In study 1, 60 undergraduates (mean age = 20.20 years) were asked to nominate up to five behaviors that they believed to be risky, and then Risk-taking Behavior Scale for Undergraduates (RIBS-U) was constructed. In study 2, 523 undergraduates (mean age = 19.82 years) completed the RIBS-U. A factor analysis of the RIBS-U revealed two significant factors that were labeled Personal Risk-taking (PR; e.g., driving while intoxicated, smoking, speeding) and Social Risk-taking (SR; e.g., tardy, running a red light, breaking a promise). The correlation between the two factors was .24. Analysis of variance revealed that males were more likely to engage in the PR behaviors than females, and females were more likely to engage in the SR behaviors than males. Study 3 investigated the test-retest reliability of the RIBS-U across 6-months period in sample of 178 undergraduates. Correlation analysis showed good reliability of the scale. Study 4 investigated the effects of risk-taking behavior tendency on negative events across 6-months period in sample of 166 undergraduates. The regression analysis revealed that adolescents who engaged in risk-taking behaviors were likely to have culpable accidents. Study 5 investigated the effects of risk-taking behavior tendency on attendance at lectures in sample of 291 undergraduates. The regression analysis revealed that adolescents who engaged in the PR behaviors were likely to be absent from the lectures. Results of these analyses showed good reliability and high construct validity of the RIBS-U.